

# 十二世紀初期のフランドルにおける政変 とエランバルド一族

守 山 記 生

## はじめに

前世紀から、<sup>(1)</sup>フランチポーテ principauté としては、かなりよく統治されていたフランドル領内において、伯が暗殺された。しかも相当の役職にあつたとはいへ、伯の不由家士の一族によってである。例えば、フランスの貴族の一族などについては、その親族構造などを明らかにすることによっていかなる政治的インパクトを与えたかといった研究は、かなり見受けられるように思うが、支配者とその不由家士の一族の関係がもたらした諸問題は寡聞にしてあまり検討がなされていないのではなからうかと思う。この小論は、同時代史料を使い、一一二七年を主にして、フランドル伯暗殺とその前後の彼の不由家士の一族の興隆と没落とから、当時の主としてフランドルの政治的狀況に

ついて考えたい。

なお、フランドル伯領は、ドイツ帝國領とも接しており、ドイツでは周知のようにアルカイックな社会体制が依然として温存され、戦士階級内部では、自由民、不由民の区別が本稿でとりあつかう当時においても残された。一方、フランス王国では、戦士階級内部において、自由民、不由民の区別は当時もはや重要な意義を失ってしまった<sup>(2)</sup>と考えられている。従って、フランドル伯領はどちらかといへばドイツ帝國型とも言い得ようが、フランス王国の大封土であり、史料の関係もあつて、あえてフランス王国側からみて行くことにする。

(1)

一一二七年三月二日、フランドル伯シャルル善良侯は、

ブリュージュのサン・ドナティアン教会の首席司祭であり、フランドルの大法官であったベルトゥルフ Bertulf によって率いられたエランバルド一族によって暗殺された。

私は、この小論でフランドル伯シャルルの書記官であり、同時代に生き、「一般的な諸事実」しか考慮に入れないと語ったガルベル・ド・ブリュージュの史料を随所に使うであろう。この日記風の史料は、日記として中世盛期で使用する可能な唯一の作品である。

フランドル伯暗殺のこの裏切りの行為によってヨーロッパ中にひきおこされた恐怖の意識は、犠牲者が、「聖なる場所」で、聖なる祈り中に、精神の聖なるあわれみで、四旬節の聖なる時に、そして施し物の聖なる行為中に、神聖な祭壇と聖者たちの神聖な聖遺物の前で「死んだ」という事実によって高められた。

フランドル伯シャルルは、暗殺されたが、遠縁の世継ぎ人たちしか持っていない。それですぐに無政府状態が起こる。早速、伯位の相統争いがおこり、七人の競争者が争う。

一方での結論をやや先取りすれば、伯領内の「貴族たち」は同盟し、ブリュージュ内の暗殺者たちを攻囲する。フランス国王ルイ六世の救援のおかげで、籠城軍は最終的に捕

えられ死刑などを執行される。国王ルイ六世の圧力の下に、かれこれする中に伯に選ばれて、ノルマン人の君主ギヨーム・クリトンは、君主アルザスのティエリに代わることを欲する諸都市と戦闘状態に入る。少し後に、ギヨームは殺される。そしてティエリがフランドルの伯位につき、権力を拡大し、確立する。

以下では、このフランドルの伯位の相統争いについては、ほとんど触れずに、伯シャルルとその不自由家士の一族との関係を主に述べる。例えば、エランバルド一族の不自由家士がなぜ伯を暗殺するにいたったかなどである。

## (II)

伯シャルルは、子供のない若いときボードゥアン七世の死で、いくらかの貴族の抵抗はなかったとはいえないけれども、一一一九年に、後を継いでいた。しかし、彼の権力掌握は、彼の成熟と経験にもかかわらず、多分彼が外国生まれであることと子供のいない状態故に、そして多分あるいは彼の気性故に、彼の先任者のそれよりも強固でなかったように思う。即ち、彼の気性は厳格で法律を重んじる人であった。伯シャルルの短い統治において、彼は、欲深い

貴族たちに疑い深く、騒動をおこす騎士たちに対しては敵しかなかった。そして、大きな城主職、即ち、ブリューージュのそれを世襲的にもち、重要な蔵入徴収長官の支配をしていて、シャルルの相続に自分たちは深く堅固に身をまもっていると思っていたエランバルド一族に伯は必然的に敵対的であることを示した。伯自身の支配を強固にするために、彼は「伯の平和」を宣言したりしたが、エランバルド一族に組み立てられているいく人かの者たち、伯の大臣のいく人かを伯はあきらかに疎んじた。そして、法的に不自由家士であることを彼らに「証明すること」によってエランバルド一族の影響力を破るといふ伯の決定は、少くとも彼らを死物狂いにかりたてた。まさに来ようとする復活祭日での法廷で、彼らの権勢の心臓部にいたベルトウルフを首席司祭職から解任するという伯の意図の噂は、一一二七年三月二日の暗殺行為とこの一族の没落を急がせたことはあり得ることのように思う。

#### 四

ここでは、前述したガルベールの史料によって、主として伯シャルルの死まで史実を列挙する。ガルベールは、シャ

ルルが伯職に着いた一一一九年から一一二四年までの彼の平和と正義に対する関心をまず述べた。次に、当時の人々は天罰と思っていたようだが、一一二四年から一一二五年までの飢饉によるフランドルの荒廃の有様を述べ、伯シャルルが貧者たちを救うためにどのように処置をとったかを、ガルベールは具体的に書く。そして、一一二三年に伯シャルルは、イエルサレム王国の王冠を、一一二五年にはドイツ帝国の帝冠をそれぞれ与えられようとするが拒否する。

ついに、一一二六年エランバルド一族の不自由家士起源の発見がなされる。即ち、敬虔な伯は、彼の領域に本来的な秩序を再確立することを望み、その領域において誰が彼に属しているか、誰が自由民であるかを見つけ出すことを求めた。そして、伯が彼に属しているとして証明できえた者たちに、彼は自己のために要求しようといまや着手した。首席司祭ベルトウルフと彼の兄弟ブリューージュの城主は、彼らの甥のボルジアル Borsard、ロベール、アルベールとこの一族の他の主だった構成員と共に、あらゆる術や欺瞞を工夫することによって、彼らが不自由家士的狀態からぬけ出し伯に属することをやめる方法を見つけるのに努めていた。何故なら、彼らは伯に属し、不自由家士的地位

にいたからである。<sup>(16)</sup>

最後に首席司祭ベルトウルフがとった自由な騎士と彼の姪たちとの結婚策も一年間の結婚生活によって自由な騎士が不自由になるといふ裏目に出て失敗し、その後、領域の長老たちは彼らが伯に属しているといふ報告をした。<sup>(17)</sup> 一二年、前述したように、ベルトウルフと彼の甥たちは死物狂いになり、ベルトウルフは伯をしばしば攻撃する言説をなした。そして、ついに、ベルトウルフは、彼の甥の全同族と共に一緒になって伯を殺すための場所と機会を定めはじめることになった。<sup>(18)</sup>

#### (IV)

最後に、一二年三月一日の夜の間、エランバルド一族の者たちは、伯に対する陰謀を決め、ボルジアルと彼の共犯者は、三月二日に伯を殺害することになった過程を、<sup>(19)</sup> ガルベールによってやや詳述する。

イザーク *Isak* とボルジアル、ギョーム・ド・ウエルヴィク、アングラン *Ingvald*、そして彼らの共犯者は、首席司祭の同意を得た後、しかし自由な意志によって、彼らがまさにやろうとしたことを実行するのを急いだ。何故なら、

伯と首席司祭の親族との間の仲裁人と調停者であった人々は、すぐに、その首席司祭の邸宅へ行き、伯の返答を知らせたからである。即ち、その甥たちもあるいは支持者たちもどちらにも彼らに対する慈悲を彼らは確保することは出来なかつたし、伯はフランドルの指導的な人々の意見が厳格な裁判で決定していたようにのみ彼らを扱おうとした。

そこで、首席司祭と彼の甥たちは、内部の部屋に引きさがり、彼らが欲する人々を召集した。首席司祭は入口を見張り、彼らは伯を裏切るだろうといふ印として互いに右手を与えた。彼らは、誓約することを拒否する若いロベールという人物に言った。「我々は、我々の崩壊のためにあらゆる方法で行い、彼の不自由家士として我々に性急に要求しているあの伯シャルルを裏切るためにいま誓約した。それで君は言動において、我々と共に裏切りを実行しななければならない。」

さて、彼らの各々は、その部屋を去り、イザークは最後に帰宅したとき、彼は寝るふりをした。彼は、夜の沈黙をまっていたが、まもなく彼は馬に乗り、城砦にもどつた。ボルジアルの宿泊所にとまり、彼とイザークの欲する他の者たちをよび出し、彼らはもう一つの宿泊所、騎士ワルテ

ルのそれにひそかに行った。それから、暗闇ゆえの安全の下に、彼らは夜明けがやって来るやいなや行方不明の行方について相談した。そして、ボルジアルの奉公人のうちで最も大胆で向こう見ずなメンバーをこの犯罪のために選び、彼らはその者たちに豊かな恩賞を約束した。伯を殺すだろう騎士たちには四マルクを提供し、同じ事をするだろう奉公人に二マルクで、彼らはこの邪悪な盟約によって結了した。それから、イザークは、その助言によって彼らに元氣をつけた後、夜明け頃に自分の邸宅にもどり、このような大罪に対して彼らを用意させた。

夜が明けとても暗く霧が深かったので、一槍の長さの先は何も見分けることが出来なかつたとき、ボルジアルは、伯の教会への入場を見張らすために伯の館の中庭に数人の従者をひそかに送った。伯はとても早く起き、そうすることとが慣習になっていたので彼自身の館で貧者たちに施し物をした。そして、そのようにして伯は教会に行く途中であった。しかし、彼の礼拝堂付司祭が報じたように、前夜、伯が寝に行つてベッドに落ち着いたとき、彼は一種の不安な不眠によつて悩まされた。そして、伯がサン・ドナティアン教会へ向つて出発したとき、彼の出発を見張つていた従

者たちが走つてもどり、伯が少数の供を連れて教会の回廊に行つたということを反乱者たちに話した。それから、その怒つていたボルジアルと彼の騎士と奉公人たちはすべて、外套の下に引きのばされた短剣をもつて、二つのグループに分かれて、同じ回廊に伯の後をつけた。それ故に、彼らが殺したいと思つている人々の誰もどんな方法によつても回廊からのがれることが出来なかつた。そして、彼らは伯が祭壇の前で低い踏台の上でひれふしているのを見た。そこで、伯は神に讚美歌を歌い、同時に敬虔に祈りをし貧者たちにベニー貨を与えた。

伯シャルルの祖先たちは、聖なるローマ教会のはじめからフランスにおいて、或いはフランドル、デンマーク、或いは神聖ローマ帝国の下に栄えていた最も強力な支配者たちの間にいた。彼らの家系から、敬虔な伯は、少年時代から完全な大人になるまで、彼の至高の祖先の気高い習慣、人生の彼らの自然の蓄積から決して離れないで成長した。そして彼が伯になる以前、多くの気高い著名な行為を貫徹した後、彼はエルサレムへの聖なる巡礼の道をとつた。海の深みを横切り、キリストの愛のために多くの危険や傷をおつた後に、彼はやつと彼の誓いを果たし、大層喜んでエ

ルサレムに到着した。そしてそこで主の墓に恭しく礼拝した後、彼は帰宅した。この巡礼の辛酸と欠乏において、主のこの敬虔な召使である伯は、彼が伯であったときしばしば語ったように、どんな極限の貧困で貧者たちが労働し、どんな誇りをもって富者たちがほめそやされているか、そして最後にどんな悲惨で全世界がおかされているかを学んだ。そして、それ故に、彼は繁栄に尊大ぶらないで貧乏な人々にやさしくし、逆境に強くなることを自分の習慣とした。「国王の強さは裁きを愛する」と讚美歌作者が教えるように、彼は貴族たちと責任ある人々の裁きによって伯領を支配した。

このような栄光にみちた君主の生命が殉死にあつてしまつた時、すべての土地の人々は彼を大いに悲しみ、彼に対する裏切者の醜行によってショックを受けた。話すも驚くべきことであるが、伯がある日、即ち、その週の四番目の日の朝にブリューージュの城砦で殺されたけれども、この不敬な死の知らせは、その後二日後の一時頃に、イングランドにあるロンドンの市民たちに衝撃を与えた。そして、同じ二日後の夕方頃、それは、フランスで遠くはなれて生活しているラン<sup>(2)</sup>Laonの人々の心をかき乱した。ロンドンで正

にその日に自分たちの仕事をするのに忙しかつたフランスの商人たちから又それを知つたように、その時にランで研究していたフランスの学生たちによって、このことを知つた。

### (V)

ついに、伯は暗殺されるが、その様子と、暗殺者の頭目のベルトゥルフとは、どんな人物であつたのだろうか。<sup>(2)</sup>ガルーベルに聴いてみよう。

この首席司祭ベルトゥルフは、聖職者の中で極度に苛酷で、少しも誇るに足らない人生を過ごした。そして、彼の司教座参事会員は誰一人として、公然とあるいは秘密裡のいづれにしても、彼に反対しなかつた。サン・ドナティアン教会の同教会員らは、かつては忠告やカトリックの教義によってベルトゥルフを抑制しえたといわれる。それ故に、ベルトゥルフは教会内で見苦しい何物も実行することができなかつた。そしてそこでベルトゥルフが自分の一族のトッブになつたとき、彼は騎士たる身分の剣をついに帯びていた甥たちを伯領の誰よりも越えて昇進させようとした。彼らの名声があらゆる所で知られるようにした。そして、彼

と彼の甥たちがとても強力なのでこの領域の誰も彼らに抵抗したり、彼らに勝つことは誰にも出来ないという風に努めた。とうとう、伯の面前で不自由家士的地位として告発され、ベルトウルフと彼の血統のすべての人々が不自由であるということを証明するために伯自身の努力によって侮辱されて、ベルトウルフはあらゆる一定の方法と工夫によって不自由家士的狀態に抵抗し、彼のすべての力で奪い取った彼の自由を維持しようとした。そして、ベルトウルフはしっかりと決心し、彼自身の親族と領域の貴族たちを巻きこむ驚くべき結果をもって、彼は長く考えることを拒否していた裏切りを、彼自身が、彼の一族と共にやりとげることになった。

殺害当日の明けがた頃、ブリュージュでの伯は、かつてのランス大司教サン・ドナティアンの教会で朝早いミサの曲を聴くために祈ってひざまづいていた。この敬虔な習慣につづいて、彼は自分の両目で讚美歌を読みさえ、その右手を施し物を与えるために拵けて、貧者たちに施し物をくばっていた。この務めには彼の礼拝堂付司祭が付き添っていた。一時課の務めが完了し、「主の祈り」といわれたとき三時課の応答も又終了した。そして、慣習に従って、伯

が丁重に声高に悔罪詩篇を読みながら祈りつつあった時、それからとうとう、彼ら自身の間でとても多くの計画や誓いや協定の後に、これらの陰謀者たち、既に心では殺人者たちは伯を殺害した。伯は聖なる天主の前でみすばらしくひざまづきながら、敬虔に祈り施し物を与えていた間、剣で打ち倒され何度も突き刺された。そしてそのようにして神は伯に殉教者の榮譽を与えられ、そのよき生命が彼の血の小川できれいに洗われ、よき務めのうちに最期をもたらし過程を与えられた。生命の最後の瞬間にそして死の襲来において、彼は自分の顔と気高い両手を剣をもった者たちのもとでも多くのつき刺しの真ただ中で、出来るかぎりよく天に向かってとても気高くあげていた。そしてそのようにして、彼は自分の精神を皆の者のなかで主に引き渡し、彼自身を神に対する生け贄として提供した。しかし、このような偉大な人物そして君主の血でそまった肉体は、彼の民衆の崇拜と彼の従僕たちの当然の崇敬なしに、一人そこで横たわっていた。伯の死の状況を聞いた者は誰でも、彼のあわれむべき死に涙を流し、殉教者の宿命によって最期にもたらされたこのような偉大で惜しむべき君主を神に委ねた。

同日の三月二日、殺人は続き、暗殺者たちは又、ブルール *Bourbourg* の城主などを殺した。伯の友人たちは敗走し、商人たちはパニック状態におちいった。<sup>23)</sup>

(V)

拙稿もかなり終りに近づいたので、エランバルド一族の家系、家族の連帯性について若干述べておきたい。これ又、ガルベールの記述は、いかなる他のものにおいてより以上にこの領域において価値がある。ドユバ・ラ・コロンヴ *Duva la Colombe* は、プリュージュの城主の任務を相続として受けとった。彼女は、ポルドランという人物と結婚したが未亡人となり、やがてドユバはエランバルドと結婚し、多くの子供たちを持つようになる。これらの子供たちは、重要な職をすべてが手に入れる。一人はエランバルド後の城主になり、他方ベルトゥルフはフランドルの大法官になる。エランバルド一族は、莫大な財産を集め、実際に、彼らの各々は要塞を備えさせた所領を所有する。この一族の娘たちは、勢力のある人々、即ち、城主、領主、フランドルの諸侯とできえ結婚した。エランバルド一族は、少し困難の時期にも、フラマンの歴史に巧みに与する。エラン

バルド一族のこの「ブロック」は、伯のそれ後の第一の勢力をフランドルで構成すると言つてよからう。エランバルド一族の個人的な勢力は、的確な地理的土台をも持っていた。即ち、彼らが出身地とするフルヌ *Furnes* の地理的連帯性である。これらの沿岸の地帯において、彼らは機会があればかなりの軍事力を動員することができた。<sup>24)</sup>

このエランバルド一族は、不自由家士の起源を有している。この時期の社会史を最も興味深くしている諸局面の一つはそこにある。十一世紀中に、全く不自由家士にあって、金持ちと類似の勢力に上昇することは可能であった。それにもかかわらず、彼らの不自由家士の起源は忘れられてはいなかった。そのことから大部分において、一一二七年のドラマがはじまる。「極度にもっと正確に言えば、不自由家士状態にもどされたままにされる」と決められて、エランバルド一族は、彼らを不自由家士状態に効果的にもどすことでもないとしても彼らの職を少くとも免ずるつもりであった伯を暗殺することを好んだ。多分、何よりも先ず、エランバルド一族の勢力が、伯自身にとって不愉快であった。いつになく珍しく彼の宮廷で、騎士階級の構成員たちのたしかに大部分が、さまざまな動機のために、エランバルド



一族の没落を挑発することを欲した。<sup>(26)</sup>

#### (四)

なぜ、伯が暗殺されたかという疑問に対して、ガルベールらは、その頭目である首席司祭ベルトゥルフの抑制のない野心とごうまんさに大いに帰するエランバルド一族の勢力扶植に世俗的な解答を見出した。この一族の興隆をもその究極的な没落をもより理解しやすくするフランドル社会に横たわっている諸勢力を充分に知ることが必要である。ある一族がこのような地位に達することがいかにこの時代と場所と可能であったかを見出すために、その表面下を見なければならぬし、あらゆる種類の証拠に求めねばならない。その一つとして、当時の経済的拡大と君主による国家形成の普遍的な西欧の現象の特殊なフランドルでの変形があげられる。<sup>(27)</sup>しかし、これらとしていくらかの局面のみ示唆するにしかすぎない。

十一世紀末期と十二世紀初期とにおけるフランドルは、貴重な成長過程を経験しながら、人々の労働が堤防によって海岸線をかたに押しやるが始まったように、その沿岸部の平野の輪郭をありありと拡大することにおいて見

られるように、流動的な社会であった。人口の急激な増加、海・沼地などの埋立て、故国や外国でのフランドルの商業活動のすみやかなテンポ、市や都市の増加、これらの相互に左右する諸要因は、充分に限定された諸階級の階層秩序にまでまだ結晶化されていなかった動的で休みのない社会を創造しつつあり、反響しつつあった。それは、ルーズに構成された時には結合しつつある集団のむしろ集塊であり、それらの集団の関係において互いに変化させ、一一二七年から一一二八年までの諸事件が明らかにしたように、新しい要求と状況を処理するために新しい形態の連帯性を展開することが可能であった。<sup>(28)</sup>

諸機会を拡大することのこのような流動的な社会秩序においては、ベルトゥルフの場合が証明するように、生涯が、才能に開かれたし、はつきりとしなない起源の諸家族は、高位に昇り得たしそして昇った。<sup>(29)</sup>

伯シャルルは、君主として、貧者たちを救い、無防備の農民たちや商人たちそして聖職者を保護することが出来た。彼は、三世紀近くの期間にわたって、この複合的な領域の土地を一緒に集めた彼の母親の祖先たちであるフランドル諸伯によって達成された人々と富に対する顕著な支配を伯

シャルルは受け継いだ故に、彼の人々の「領主にして父」として羨望すべき名を得ていた。十一世紀の半ばに、フランスの王権の大封土に「帝国フランドル」の封土を加えて、フランドルは、「王権の下に」、少くとも、伯の支配下にある直接的にその大きい中心となる「所領」内で効果的な統治機関を次第に形成していた。<sup>(2)</sup>

このような一般的な伯権力中、エランバルド一族の頭目ベルトゥルフらは、伯シャルルにいわば戦いをいどんだ。伯の領域にわたって充分に君主としての支配を回復し揮うための伯の諸努力において、この伯は彼を滅ぼさせ、堅固に身を守っていた親族集団に挑戦した。しかし、伯の破滅において、彼ら自身も一族として破滅した。伯の暗殺という無政府状態の結果は、アルザス家の全集団に対する伯権力の効果的な再主張とフランドルにおける領域建設の首尾よい回復を可能にした。<sup>(3)</sup>

## むすびにかへし

私は、重要なガルベールの同時代史料を随所に使って、十二世紀初期のフランドルの政治状況を見てきた。焦点においたのは、充分に述べつくせなかったが、支配者たるフ

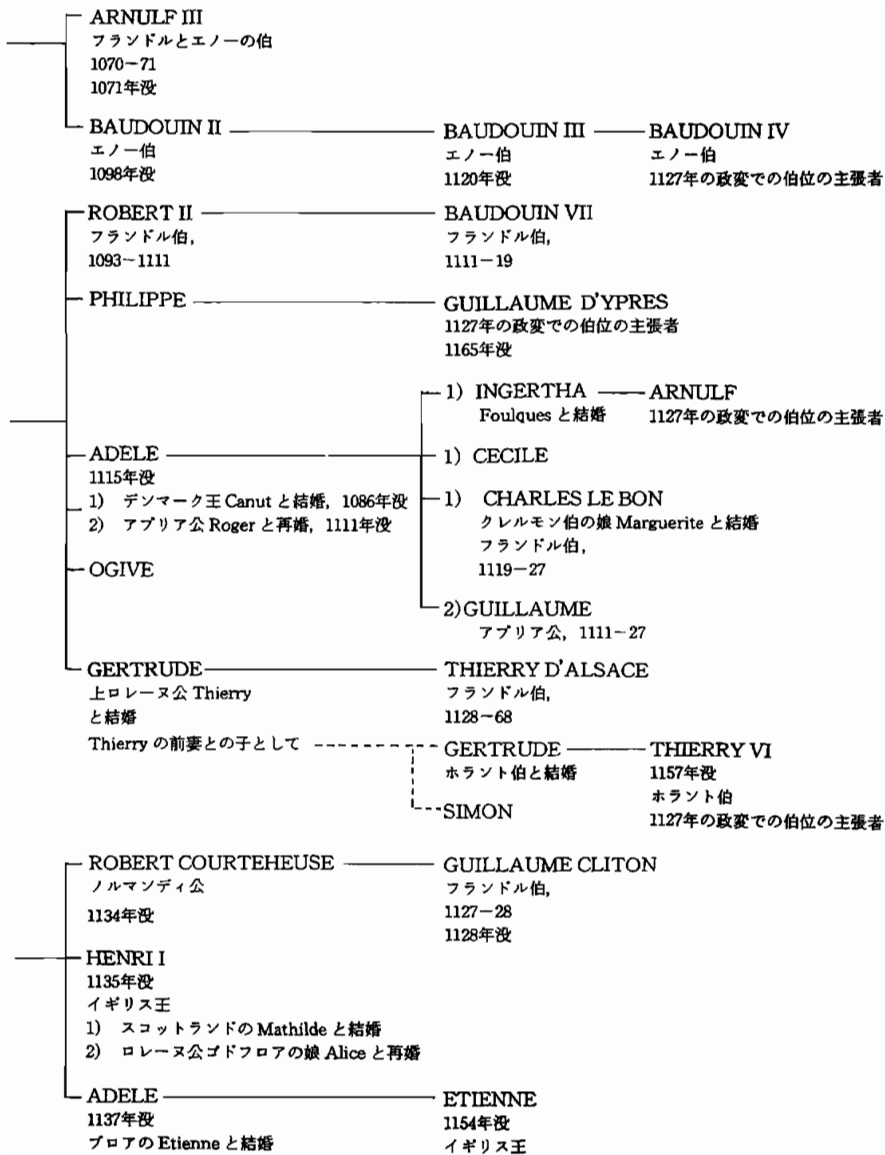
ランドル伯と彼の不自由家士の一族との関係の問題である。この問題のうちでは、封建社会の構造そのものがはらむ、大きな問題点がないわけではない。即ち、身分的には不自由で、しかもかなりの高位な役職についていた一族についてである。このような重要で一般的な問題点については、今後の課題としたい。

上述したように、不自由家士の一族の問題は、一般的にはかなり大きな問題性をはらむのではないかと思うが、フランドル伯暗殺とエランバルド一族の興亡は、たしかに特殊な出来事でもあった。一一二七年の政変で、エランバルド一族が、どのような役割を果たし、その後にかに一族が興隆を示し、又、没落していったかという主に叙述的な結論で、この拙稿を一応終わらざるをえない。

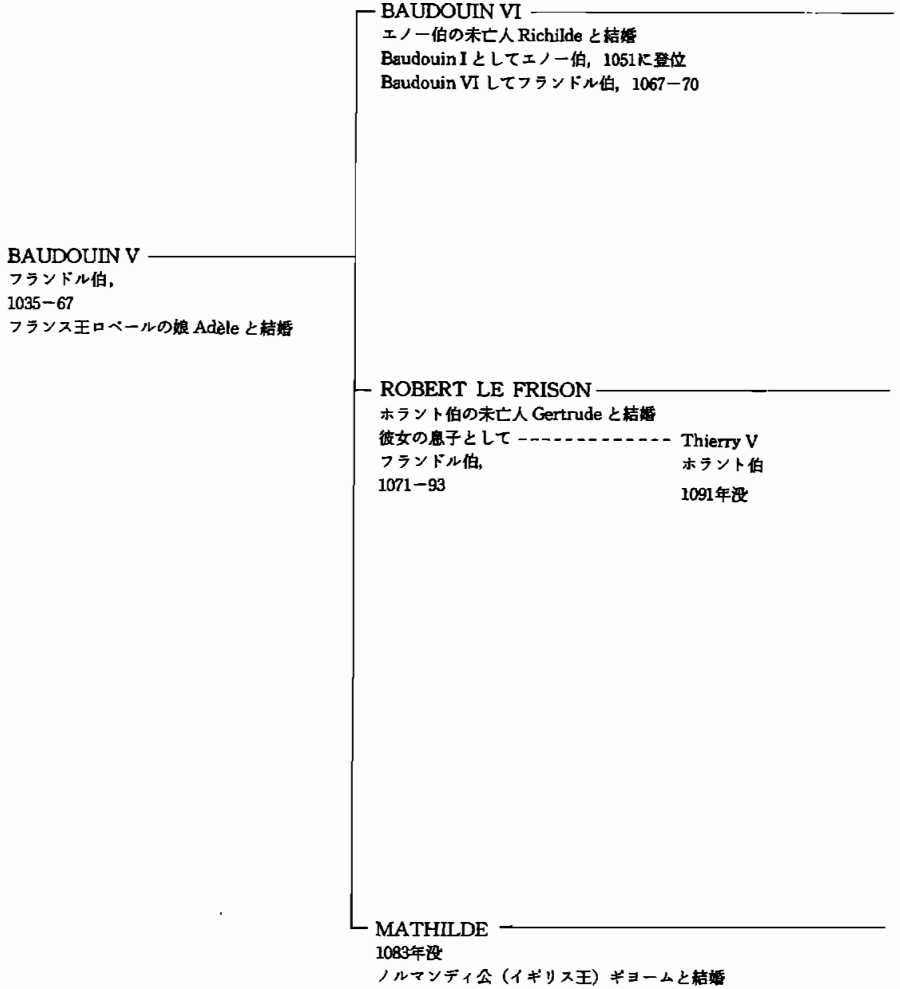
[注]

- (1) J. Dhondt, Développement urbain et initiative comtale en Flandre au XI<sup>e</sup> siècle, Revue du Nord, t. 30, 1948.
- (2) J. Heers, Parties and political life in the medieval West, 1977, pp. 226—227. (仏語版) J. Heers, Les partis et la vie politique dans l'Occident médiéval, 1981 p. 247. (この引用箇所は省略されてゐる。)
- (3) J. Dhondt, Les (Solidarités) médiévales. Une société

- en transition : la Flandre en 1127—1128 dans : Annales. Economies•Sociétés•Civilisations, 12, 1957, p. 530.
- (4) R. Köpke, ed. Passio Karoli comitis auctore Galberto, MGH, Scriptores XII, 1856, pp. 561—619. Galbert de Bruges, Le meurtre de Charles le Bon, traduit du latin par J. Gengoux, 1978. The murder of Charles the Good, count of Flanders by Galbert of Bruges, translated with an introduction and notes by J. B. Ross, 1967. 凡そトビタテ 歴史の探求と史料の活用。
- (5) J. B. Ross, Rise and fall of a twelfth-century clan, the Brembalds and the murder of count Charles of Flanders, 1127—1128, dans : Speculum, 34, 1959, p. 367.
- (6) J. Dhondt, Les (Solidarités), p. 533.
- (7) A. Giry, Histoire de la ville de Saint-Omer et de ses institutions jusqu'au XIV<sup>e</sup>s., 1887, p. 45.
- (8) 國田マユキ和史堂の鑑定とリソビタテ F. L. Ganshof, Le Roi de France en Flandre en 1127 et 1128 dans : Revue historique de droit français et étranger, 4<sup>e</sup> s., 27, 1949, pp. 204—228 史料の活用。
- (9) J. Dhondt, Les (Solidarités), p. 533.
- (10) J. B. Ross, Rise and fall of a twelfth-century clan, pp. 389—390.
- (11) The murder of Charles the Good by Galbert of Bruges, pp. 82—84.
- (12) Ibid., pp. 84—86.
- (13) Ibid., pp. 87—89.
- (14) Ibid., pp. 92—93.
- (15) Ibid., pp. 90—92.
- (16) Ibid., pp. 96—98.
- (17) Ibid., pp. 99—100.
- (18) Ibid., pp. 101—102.
- (19) Ibid., pp. 108—114.
- (20) 中世都市の発展と市民意識の形成——中世都市の発展と市民意識の形成——「奈良史学」第三号、一九八五年と「回廊」第四号、一九八六年を参照。
- (21) ガルベールは「ベルタールの風習であった」といわれるが、前述したようにランヴェル伯シャルルの轉記であった。従って彼が伯シャルルを真贋するのには矛盾であり、彼自身の手記ならぬことを示唆している。拙稿には充分果敢な「たが」一定の矛盾をもちきめる必要があつた。
- (22) The murder of Charles the Good by Galbert of Bruges, pp. 115—119.
- (23) Ibid., pp. 120—127.
- (24) J. Dhondt, Les (Solidarités), pp. 544—545.
- (25) Ibid., pp. 545—546.
- (26) J. B. Ross, Rise and fall of a twelfth-century clan, p. 387.
- (27) Ibid., pp. 387—388.
- (28) Ibid., p. 388.
- (29) Ibid., p. 389.
- (30) Ibid., p. 390.



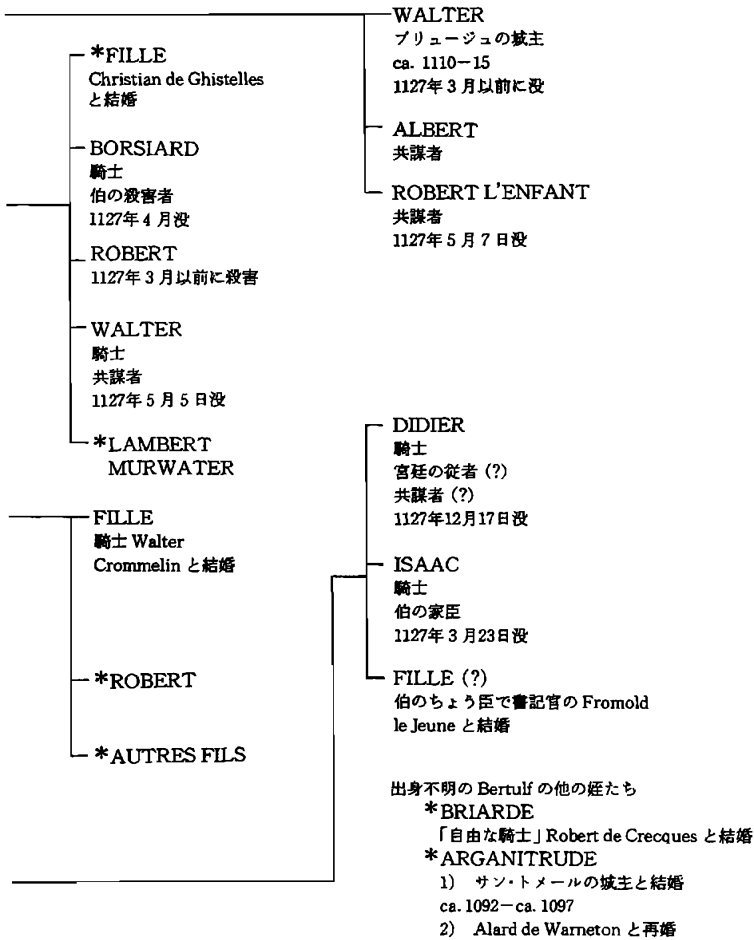
フランドル伯の家系 (1035年から1128年まで)



出典: The murder of Charles the Good, count of Flanders by Galbert of Bruges, translated with an introduction and notes by J. B. Ross, 1967, pp. 314-315.

Galbert de Bruges, Le meurtre de Charles le Bon, traduit du latin par J. Gengoux, 1978, p. 250.

なお、双方とも一部省略した。

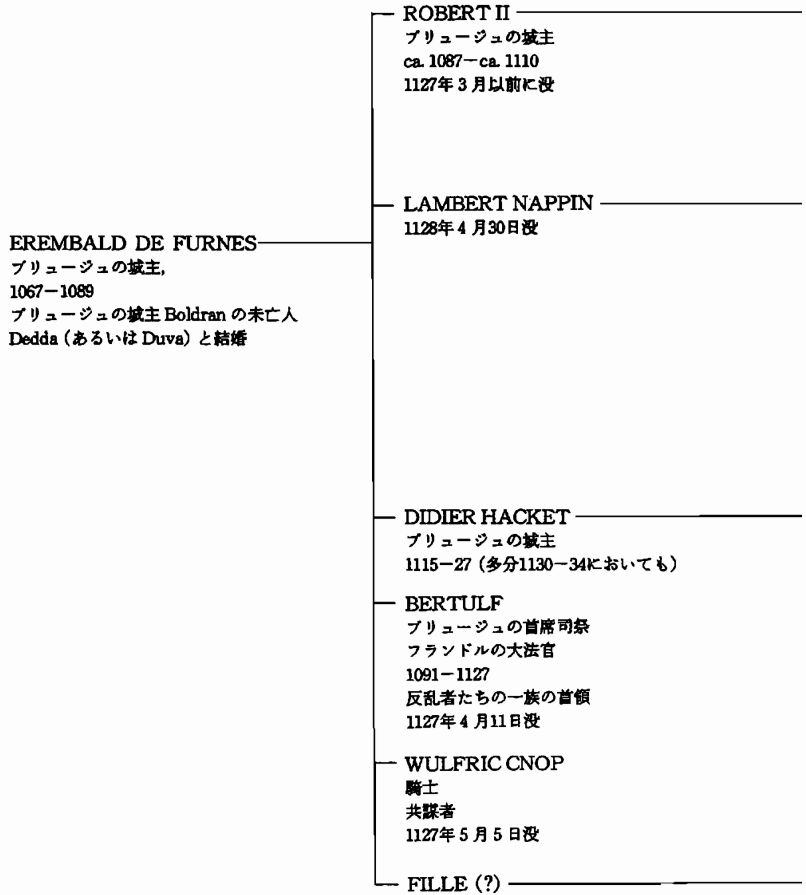


出典: The murder of Charles the Good, count of Flanders by Galbert of Bruges, translated with an introduction and notes by J. B. Ross, 1967, pp. 316-317.

Galbert de Bruges, Le meurtre de Charles le Bon, traduit du latin par J. Gengoux, 1978, p. 251.

なお、双方とも一部省略した。

## エランバルド一族の家系



\*その名前が、ガルベールの記録以外の他の諸資料に出てくる人物